

WACC（世界キリスト教コミュニケーション協会） アジア地区総会に参加して

FCTが法人会員として加盟するWACC（World Association of Christian Communication）のアジア地区総会およびセミナーがマレーシアのクアラルンプールで2002年11月12日（火）から15（金）までの日程で開催された。総会は3年ごとに開催されている。今年度のテーマは「コミュニケーションにおける和解のモデル」（Reconciliatory Models of Communication）である。

総会にはWACCに加盟するアジア地区の団体および個人が出席し、香港、インド、インドネシア、マレーシア、ミャンマー、パキスタン、フィリピン、韓国、台湾、オーストラリアなどから研究者、NGO代表者・聖職者など50名が集まった。日本からはFCT事務局の関根が参加した。以下に総会の概要と発表および討議内容などを報告する。

1. 総会（セミナー）の概要

11月12日（火）／セミナー

- ・プレゼンテーション1「和解に向けたキリスト教会の意義と暴力へのビジョン」（ディーナバンドゥ・マンチャラ／World Council of Churches）
- ・プレゼンテーション2「和解に向けた実践的課題」（マーク・ハースト、メアリー・ハースト／オーストラリア・アメリカ）
- ・プレゼンテーション3「コミュニケーション：和解と対話の文化」（ジョン・ジョシュバ・ラジャ／インド）
- ・グループ別討議

11月13日（水）／セミナー

- ・プレゼンテーション4「人権問題としてのコミュニケーション倫理と正義への努力」（ブカレン・サボイ／フィリピン）
- ・パネル報告（フィリピン、インド、インドネシア）
- ・グループ別討議結果発表と決議

11月14日（木）／総会1日目

- ・アジア地区活動報告
- ・世界情報社会サミットについて
- ・地域別討議

11月15日（金）／総会2日目

- ・地域別討議の報告／役員選挙
- ・「クアラルンプール宣言2002」の採択

2. 「和解」への道～各国の事例報告から

発表者による報告は「和解」をテーマに各国でのコミュニケーションに関わる諸事例や教会・聖職者としてのコミュニケーションの意義を考えるものが中心であった。インドからの参加者は、カーストの被差別層や女性、子どもといった暴力の犠牲者が、社会的マイノリティであることが問題の解決を遅らせていること、思想によって暴力が正当化されることの恐ろしさを宗教紛争を例に報告。さら、これらの暴力を撲滅するためには、支配的な価値観に対するオルターナティブを探ることが最も重要だと述べ、人権や多様なレベル（個人、団体 etc）の相互依存性と権力に対するオルターナティブについて検討すること、暴力を肯定する社会への教育などを今後の課題として挙げている。（プレゼンテーション1）

また、和解に向けたひとつの取り組みとして、対話の必要性を強く述べる報告もあった。

対話は人々がともに学び、互いの健全な関係を築き、よりよい将来性をともに創造することに貢献する。問題は、各人の宗教における「他者 (others)」の認識にあり、教えによっては、子どもでさえも他者 (他の宗教の信者) を敵とみなすようになる。このような認識はメディアを通じて刷り込まれると指摘した発表者 (キリスト教信者) は、イスラム教徒と生活した経験を持つ。彼によると宗教上の問題は、他者に対する「無知」と「誤解」によるものだという。他者への認識は、クリティカルに研究し、挑戦されなければならない。宗教者は他者へのポジティブなイメージに接触する必要があると主張した。そして、そのための情報源となるのが、メディア、とりわけニュースメディアであると述べた。

さらなる課題として異なる宗教のコミュニティ間でコミュニケーションを実現させる取り組みの重要性についても付与した。(プレゼンテーション3)

WACCは、かねてよりアメリカをはじめとする巨大メディアの情報支配に対し批判的な立場を明確にしているNGOであるが、この会合においても、その姿勢を随所で確認することができた。

複数の宗教者が共存する社会におけるマスコミュニケーションの役割について報告したフィリピンの発表者は、メディアは誇張する性質があり、「現実」がつくられることを、米メディアによるテロリズム関連の報道を例にして語った。オサマ・ビン・ラディン氏のインタビュー映像の信憑性への疑問 (断食期間にも関わらず食事が置かれている etc.) や、フセイン大統領を“私たちの”敵と称したレポーターの例を挙げ、アメリカのメディアがワシントンの

アジェンダを広めるために存在するのだと指摘し、その後の議論—アジア地域として何ができるか?—といったオルタナティブなコミュニケーションを求める方向性の採択に影響を与えることとなった。(プレゼンテーション4)

和解に向けた活動事例をテーマにした各国からのパネル報告では、フィリピン国内での長期に渡る争いを解決するため、現地語で記録された資料をタガログ語に翻訳し、多くの人を読めるようにするという取り組み、インドネシアでは、今まで「和解」を実現したことがないため和解の意識が薄いこと、貧困層を含めたできるだけ多くの人々がいかに情報にアクセスするかについて、またインドでは、カーストのみならず、それをさらに細分化した900のサブカーストが和解をさらに難しくしていることや、被差別層への支援の例として教会の取り組みなどが紹介された。

これらの報告を参考に、グループに分かれて様々な見解を発表しあった。その結果を反映し、最終日までにまとめられた宣言文が「クアラルンプール宣言 2002」である。

3. クアラルンプール宣言の採択

この会合における一連の議論は、最終日に「クアラルンプール宣言」としてまとめられ、採択された。

クアラルンプール宣言 2002 (要点)

- ①権力のない弱者が発言できるようなプログラムやプロジェクトを企画する。私たちはメインストリームメディアに浸透する暴力の文化を危惧しており、私たちのコミュニティ、教会、地域における立場の弱い人々にチャンネルを提供し、自ら発信することを可能にしたい。
- ②デジタル・デバイドを縮小する。情報社会の発展により、情報へのアクセスを持つ人が、それらの情報によって権力を得る。ゆえに、情報

技術に関する知識を民主的にするプログラムやプロジェクトを企画し、伝統的なメディアの使用も奨励する。

③メディア教育、メディアリテラシーとメディアを改革するプログラムを企画し、人々がメディアの受動的な受信者ではなく、クリティカルで目の肥えた、情報の識別ができるユーザーとなるようにする。

人々の価値観や態度、行為をつくるメディアのパワーを認識し、オルターナティブメディアについてのプロジェクトや研修ワークショップを企画しメインストリームメディアに影響を与え、メディアの改善に向け努力する。

④異宗教間、異文化間の関係を改善することを目的に、研修プログラム、セミナー、ワークショップを企画し同じ目的をもつ組織との地域協力と連帯を強化する。

⑤「和解」の事例の収集をより積極的に行い、その成功事例とともに失敗や弱さについても強調する。この宣言文の正式文書はWACCアジア地域支部のホームページに掲載されている。

(<http://www.arwacc.org/>)

4. 参加後の所感

WACCの活動の主眼はマイノリティの声を反映することによって文化的・社会的対立を解決することであり、その方法としてコミュニケーション分野の改善が検討されている。今回のテーマである「和解」についてもメディアの役割を論じる機会が多かった。

筆者が加わったグループ別討議では、紛争を撲滅し和解を実現するためには、特に子どもや若い人々が他の宗教文化に触れる機会を如何につくるか、またそれを宗教的リーダーとしてどうイニシアチブをとり支援するかを話し合った。

また、アメリカのメディアによるテロリズム

関連報道が、イスラム教徒すべてをテロリストだと誤解を与えかねない内容だという指摘もあり、報道内容をクリティカルに読み、事実と正義を伝えることもまた、私たちの役目だと合意した。

この会合で討議され結論に至った内容はすぐに実現可能なものではないが、同じアジア地域の代表としてそれぞれのNGOや個人が抱える課題や価値観を共有したことには大きな意味があった。また、メディアのメッセージに対するクリティカルな視点を持つこと、オルターナティブな考え方を提示し発信できるようになることの重要性はもはや述べるまでもないが、そのための能力であるメディア・リテラシーが、“根源的な”人権として、貧困、紛争、開発、教育の課題と深く関わっていることを、NGOや聖職者の実体験に基づく報告から確認することができたのもまた大きな収穫であったと思う。

メディアの影響力を踏まえた草の根レベルでの地道な活動を約束しあい、グローバルな視野をもったメディア・リテラシー活動をさらに推進していこうと筆者が決意するきっかけとなった有意義な4日間となった。今後もFCTとして、WACCとの協力関係において、グローバルな活動を展開していきたい。

(報告 関根里砂)

— 『fctGAZETTE』 No. 79(2003年3月)掲載 —